
初めましてから始めよう

くまぞう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めましてから始めよう

【Nコード】

N5104Q

【作者名】

くまぞう

【あらすじ】

自分にコンプレックスを持つ主人公、橘涼子 通称たっちー

女たらしだが意外とまじめなイケメン、藤田裕樹

好きな人に素直になれない同級生、川田美佳

卑屈で鈍感な半干物女と女たらし、時々嫉妬に燃える女でお送りする切なく歯がゆい恋物語。

プロローグ（前書き）

小説を投稿するのは初めてですが、このモチベーションが続く限り頑張らせていただきたいと思います。

本作の登場人物は関西弁で会話させております。不快を感じたりする方は閲覧をお控えすることを差し出がましいながらもお勧めさせていただきます。

誤字・脱字や表現のおかしなところなどがありましたらご報告いただきますと嬉しいです。

ブローグ

ブルブルブル…

休日にはめったに鳴らない携帯がメールの受信を知らせる。
いい気持ちで寝とったのに。

”珍しいなあ…なんやる？”

慣れた手つきでメールを開いた。川田からや。

” たっちー！今度の日曜暇？久しぶりに遊ぼうや！！”

いきなりどいつ風の吹き回し？まあええか、暇やったし。

” 暇やでー。どこいくん？”

簡単な文を返す。ブルブルブル…返信はやっ！

” 地元に新しいショッピングモールできたんよ！そこで買い物しよ

”

地元で… あんたは住んでるからええわ。遠いっちゅうに。
高校を卒業してから隣の県に一人暮らしをしているので地元に戻る
のは面倒だ。
いっつも呼びつけんねんから、もう。

”たまにはこっち来てくれん？遠いんよ…”
交通費も馬鹿にならんよ！

”えー、めんどくさいー！たっちーが来て！！”
…はあ。こっいう子やもんなあ…

”わかった。１２時に駅前でいい？”

”うん！楽しみやわあ！ほな来週ね。”

ふう。誘ってくれるんはいいけど勝手なんはかわらんなあ。

私、橘涼子とメールの相手、川田美佳は高校時代からの友達。…と
いっても高校卒業してからはあんま連絡も取ってなかったんやけど。
数少ない高校時代の友達やから無碍にはできひん。

なんで数少ないか、というと…つまり、あれや、ねえ？察してください。

まあそんなこんなで川田と遊ぶことになったし、着ていく服でも買いにいこかなー。
一人で…切ないなあ。

>川田視点<

「…よし、と。裕樹い、たっちー来てくれるって。」

「ほんま！？ふっふっふ、これでまたセフ…ゴホン、友達が増えるわ！」

ほんまにこいつは…そればかりやなあ。

「ごまかしても聞こえてるし。てか紹介した子たぶらかしすぎやって！」

「だってお前の紹介の子ってなんか微妙な子多いし。本気になれる子おらんねんもん。ちゃんとオレの好みの子紹介してや！」

人の気持ちも知らんと、好き放題言いやがって！

「（好みの子なんて紹介するわけないやん…）」

「え、なんか言った？」

「何でもない！それより来週の日曜やで。すっぱかさんといてや！」

「おう！今度の子はかわいいといいなー。なあ、どんな子なん？」

ぽつちやり系のがり勉ですー、ていうたらどんな顔するかな？まあ今言ったらおもないし黙っとこ（笑）

「ええ子やで。頭もいいし話しててもおもしろいし！」

中身はめっさ美人やけどね（笑）

「見た目に触れへんということはまた微妙なんか…あれやな、類友やな。」

「ちょっとそれ失礼ちゃう！？もう女の子紹介せえへんで！」

ほんまは…一人も紹介なんてしたくないのに。気づいてよお…

「ごめんで！冗談やん！美佳様愛してるー！」

な〜んて私の気持ちなんてわかるはずもなく無神経なことを言う。あほみたいや…

「はいはい、わかったわかった。ちゃんとどこ回るとか決めといてや。」

「どうせいつも3人で回ってんねんし決めといてや。向こうの好みなんてわからへんし。」

「なんで私が決めなあかんのよ！？知らんからね。あと、たっちー

に裕樹のこと紹介するって言ってないから。」

「はあ！？なんでやねん！変な感じになるやん。」

「男紹介するとか言ったら絶対きてくれへんもん。純情らしいから（笑）」

「純情とか…めんどくさいパターンか…まあ一回会っておしまいやろしええか。」

そうそう、それが狙いなんやから。彼女なんて絶対に作らせへん。ずっと…ずっと隣におるんは私でええねん。

裕樹とカフェで別れてから最後にたっちーに会ったのはいつだったか思い返してみる。

成人式だったっけ…？高校の時よりはましになってたけどそれでもかなりぽっちゃりだったのを覚えている。

高校時代のたっちーは遠くから見るとまるで正方形だった。言いすぎかな？でもかなり横幅があって恰幅のいい女子だった。そんなたっちーにひそかに優越感をもっていたんだけど。

普通そんな容姿だったらいじめのひとつやふたつあってもおかしくないのに、たっちーは不思議と人を惹きつけた。やさしいし、勉強もできて面倒見もよかった。たっちーに会うまで人間は見た目で決まるんだと思ってたけど、中身で慕われる人もいるんだって思い知らされた。

実際、高校時代にモテていた男子もたっちーのことを好きだった、とこの前の同窓会で聞いたばかりやし。

まあでも裕樹はほぼ外見重視やし、たっちーのことを好きになるなんてありえへんよね。

たっちーもチャライ男は苦手やったし、今回もなんとかやり過ごせるやろ。

裕樹の彼女になるのは私なんだから。

> 橘視点<

あゝもうすぐ日曜かー。川田に会うん久しぶりやなー。

成人式以来や。もう看護師になったんやつけ？夢やったもんな。

…川田に会ったら、ううん、高校時代の知り合いに会ったら嫌でも高校の頃を思いだす。

ぶくぶくに太って、冷蔵庫みたいな体。年中下膨れの顔。コンプレックスの塊だった。

あの頃は道を歩くたびにすれ違う人に陰口を言われているのではないかとずっと周囲の目を気にしていた。

この人は私を見て笑っている。あの人は私のことを汚いものを見るような目で見ている。そんな被害妄想を募らせる日々。唯一自慢できることといえば勉強だった。私の容姿を笑う人を見返したくて必死に勉強した。志望校に合格し、逃げるように地元を離れ、大学の近くに暮らし始めた。心に余裕ができ、痩せる決意をした。かなり時間はかかったが、5年かけてやっと平均体重まで体重を落とした。これでコンプレックスはなくなったかと思ったけど、やっぱり僻みひがみ 根性は直らないものだ。

卑屈な性格とはもう少し付き合っていかなければならないみたい。

少し暗くなってしまった。いけないいけない。

せっかく久しぶりに会ったもん、話すネタでも考えておくか。

メモ、メモ…と。

プロローグ（後書き）

…文章を書くのって難しいですね。
まったくまもらん。

1 〽出会い〽(前書き)

注意書きはプロローグにて。

登場人物の詳しい説明って必要ですか…？

1 〽出会い〽

> 川田視点<

約束の日曜日、私と裕樹は駅前のカフェの窓際の席に座っていた。待ち合わせの時間は12時だが、今はまだ11時30分を少し過ぎたくらいだ。

「たちーはまだ来ないだろうし、少し打ち合わせしとこ。」

「打ち合わせって何を？普通に茶飲んでぶらぶらすればええやん。」

「だからあ、言ったやろ？たちーは紹介とかは苦手やって。身構えるもん、絶対。」

「ん〜、じゃあ偶然待ち合わせ場所で会って暇やし一緒に遊ぼうぜ！みたいなノリは？」

「…まあ悪くないかな、それならたちーお人よしやから断らへんと思う。」

「はい、きまり〜。ほんならオレはかわいい子探しでもするかな〜。」

そういつて裕樹は店内の女の子を物色し始めた。今から友達くるって言ってるのに！

呆れながら裕樹の横顔を盗み見る。

あの二人組みのショートの子がかわいいとか、ウェイトレスさんの太ももがぐつとくるとか…。

黙ってればほんまにイケメンなんやけどなあ。

「おっ、今入って来た子かわいくない？あの子めっちゃタイプや！

！」

「（はっ！？ふざけんな！）…どの子？」

「あのカウターの近くの席に座った子！なあ、あの子が橘さんやったりせん？」

裕樹が騒いでいる子は白いシフォン生地ブラウスに花柄のミニスカートをあわせたいかにも女の子然としたかわいらしい子だった。ふーん、ああいうのがタイプなんや。

でもたっちとは全然違う。たっちはもっとなんかこう、どっしりしている。

「ないない。見たら一目でわかるもん。しかもまだ待ち合わせまで20分あるし。」

「そっか、残念やな。オレ一人やったら絶対声かけたわ。」

「ごめんね、お邪魔虫で！」

「うそうそ（笑）橘さんもあんな子やったらええなー。」

ごめんね、その期待裏切っちゃいます（笑）かわいい子なんて紹介するわけないやん。

たっちがきた時の裕樹の反応を想像するだけでにやけが止まらん。

たっちには悪いけど私が裕樹と付き合えるためには何でもする。たとえ友達をかませ犬にしようとも。

「あつ、あの子もかわいいー！でもパンツスタイルよりスカートの方が似合うと思うな！」

…一生言ってる。

そんなやりとり（というかほとんどが裕樹の女の子批評やったけど）が続いて、時計は12時を指した。

ずっとカフェに入ってくる人を見てるけど、たっちーらしき人物は入ってきてない。高校時代は私が待ちぼうけを食らわせることはあったけど、たっちーは待ち合わせの5分前には必ず来てたのに…遅刻かな？それにしても連絡ないし…

と思ったら聞きなれた受信音が携帯から流れた。たっちーかな？

”もう店におるんやけど、また遅刻？”

…は！？いつの間に入ってきたん？私らより先にきてたんかな？あたりを見回してみてもたっちーらしき人影はない。二階にいるんか？待ち合わせ場所間違えてんのかな？

「なになに、橘さん？」

「うん。もうおるんやて。ずっと入り口みてるけど入ってきてないやんな？」

「いや、オレ橘さんどんなんか知らんし！」

「あ、そうか。でも入ってきてないんやけどなあ…。」

”わたしもずっと店におるよ？てかたちー待ち合わせ場所間違えてない？〇〇コーヒーやで。”

そうメールを送ってから携帯がまた震えた。おつ、電話や。

「もしもし？」

『メールめんどくさいから電話にした。うちもそこにおるよ。どこら辺に座ってる？一階？』

「うん。トイレの近くの窓のそこ。たっちー二階におるん？」

『いんや、一階に居るよ…て、ああ、見つけた。あれ？男の人と居る？なぜに？』

「ああ、後で説明するわ…ってどこよ、たっちー？」

『今から行く。店員さんにいわなあかんし。待ってて！』

「わかったー。また後で。」

いつの間に店に入ってきたんやろ？てか見つけれへんかったし。まあ、みつかったんならいいか。ミルクティーのおかわりもらおうと。

「橘さん見つかったん？」

「うん。もうすぐこつち来るってさ。やっぱ裕樹が居ることに驚いてたからへましたらあかんで！」

「へまってなんやねん！まあ悪い印象を与えんよう努力します。」

少し緊張を帯びた顔をする裕樹をほほえましく思いながらたっちーを待つ。

すると少ししてから、さっきのかわいらしい女の子がこっちに歩いてくるのがわかった。

トイレやろうと思って気にしないでいたら。

「久しぶりー、川田。元気にしてた？」

たっちーの声がした。声のする方を向いても女の子が立っているだけ。

たっちーを探してキョロキョロしていると、また声をかけられた。

「いやいや、目の前で無視はなかるうよ、君。橘さんはここですよー？」

…嘘や、嘘やうそうそ。私の知ってるたっちーはこんなにかわいらしいオーラを放つ人間やなかった。

成人式の時もぶくぶくやったのに。おかしいやん、こんなの！

「ほ、ほんまにたっちー？私をだまそうとしてるんやなくて？」

「あんたをだまして何の得があるんよ（笑）…あ、そうか。痩せてから川田に会ってなかったっけ？」

「そそそそそうよ、こんなんになってるなんて知らなかったし！！びつくりしたわ！」

「こんなんで…ひどない？」

あわてる私をよそに自称たっちー（まだ信じていない）はこころと笑い出した。

この笑い方、確かに見覚えがある。…この子はたっちーや。

妙に納得した所で、横から声がかかった。

「あのー、全く状況がつかめてないんやけど…？この人が橘さんなん？」

あ、裕樹のこと忘れてた。…そうや、裕樹！さっきたっちーのことタイプやっていったような…

え、それやばいじゃん！！

「う、うん。そうみたい。」

「そうみたいってなによ！だから私やっていってるやんか！で、お隣の男性は知り合いなん？」

たっちーが弘樹のことを尋ねてきた、当たり前か、二人で待ち合わせのはずが男座ってんねもん。
私が説明しようとしたら裕樹が割って入って来た。

「はい！オレ、川田の友達の裕樹っていいます！どうぞよろしく！」

「は、はあ…、よろしくお願いします。あの…なんで名前だけなんですか？」

「橘さんには名前で呼んでほしいんで、苗字は教えません！裕樹って呼んでな！」

「…」

たっちーが無言で説明を求めてくる。ああ、厄介なことになった。

「とりあえず、たっちーも座り？ゆっくり説明するから。」

たっちーを隣に促し、私はひとつ息をついた。

…なんか嫌な予感がする。ひしひしと。

> 橘視点 <

んーと、待ち合わせが12時やから、10時の電車に乗ったら余裕かなー。

早くついたらケーキでも食べて待つてるか。あそこのケーキおいしいんよなあ♪

川田と約束してた日曜日がきて、私は地元に向かうため駅に向かった。

久しぶりに川田に会うから少しおしゃれをしてきた。自分に合わないとはわかってはいるけどお店で見て一目ぼれして買った、白いブラウス。ふわ〜つとしててめっちゃめっちゃかわいい！勢いで買ったのはええけど、このブラウスに合う下を持ってなかったから同じお店で、店員さんに小さな花模様がちりばめられたこれまたかわいいスカートを見繕ってもらった。

めっちゃかわいいんやけど、かわいすぎて全く似合わなくなってしまった。まあ馬子にも衣装っていうし、大丈夫やんな！

…と思つて開き直ったけど、やっぱり恥ずかしい。しかも駅は人が多いから余計に。

ああ、やっぱりいつもの感じにすればよかった…そう思い始めたら、周りの人が私の服を笑っているように思えてきて仕方がなくなった。被害妄想だとはわかっているのだけど、マイナス思考から抜け出せずにいた私には周囲の反応になど気づけるはずもなかった。

”なあ、あの子かわいくない？”

” え、どれ？おお、まあまあちゃう？”

” デートかなー？なあ、誘ってみたいひん？”

” でもあの子なんか自分の世界に入ってるっぽくないか？”

” そうか？お前が行かへんなら俺は行くで！”

「なあなあ、君一人なん？」

「ふえっ！？あ、私ですか？あ、いやその一人というか一人やなくなるというか…」

「待ち合わせなんや。もしかして彼氏とか？」

「ちちがいますよ！え、あのだちら様ですか？」

「友達となんや。よかった。それやったら俺らと遊びにいかへん？友達も一緒に！」

「…あの、け、けけ結構です！！すいません！ごめんなさい！」

「あ、ちよっ…逃げられた。」

…また声をかけられた。なんでうちみたいな不細工に声をかけるんやろ。…って理由は薄々わかってんねんけど。高校時代も私に告白するのが罰ゲーム、というのが一時期はやった。多分、私の反応を見て皆で笑っているのだろう。自分で言ってる悲しいわ。

あかんあかん、今日は川田に会っんやから気持ち切り替えな。ブル
ーになってたら心配させてしまうわ。前向き前向き！

カフェについたのは約束の12時よりもだいぶ早かった。この時間
やったらまだ川田は来てないやろ。いつも遅刻ぎりぎりか遅れてく
るし。

「いらっしやいませ、お一人様でよろしいですか？」

ウェイトレスさんが声をかけてくれる。

「後でもう一人来るんで、二人の席でお願いできますか？」
「かしこまりました。こちらのお席へどうぞ。」

ウェイトレスさんに席へ案内してもらってすぐ今日のケーキセット
を確認する。

あ、モンブランや！やったあ！モンブラン大好き♪

すぐにケーキセットを注文して時計を見る。

…まだ20分前か。ゆっくり食べられるな。ふっふっふ、モンブラ
ンモンブラン！

運ばれてきたモンブランに舌鼓を打ちながら川田を待つ。いや、もはやメインがモンブランだ。
甘すぎず、濃厚なマロンペーストと程よい硬さの生クリーム、そしてリキュールのきいたスポンジ…うああめっさおいしい！もう一個欲しい！

うだうだゆっくり食べていたら約束の時間になっていた。モンブランに夢中になっていたせいで川田がすでについているのかわからない。一応メールしてみるか。

”もう店におるんやけど、また遅刻？”

少しそっけないのはご愛嬌だ。遅刻しているんだもん、文句は言わせない。

するとメールが返ってきた。相変わらず返信早いなあ…。

”わたしもずっと店におるよ？てかたちー待ち合わせ場所間違えてない？〇〇コーヒーやで。”

間違えるもんかい！ここのケーキをどれだけ楽しみにしていたと思っ
っているのだ！
という前にもうおったんや。気づかんかった。

えーい、メールは面倒や、電話しょ！

『もしもし？』

「メールめんどくさいから電話にした。うちもそこにおるよ。どこら辺に座ってる？一階？」

『うん。トイレの近くの窓のところ。たっちー二階におるん？』

「いんや、一階に居るよ…て、ああ、見つけた。あれ？男の人と居る？なぜに？」

『ああ、後で説明するわ…ってどこよ、たっちー？』

「今から行く。店員さんにいわなあかんし。待ってて！」

『わかったー。また後で。』

見つけたのはいいものの、なぜか川田は男の人とおった。彼氏さんかな？いやいやそれやったらメールで興奮しながら報告するやろしなあ。こっちは二人席やから向こうに移動しよう。

ウエイトレスさんに席を移動することを伝えてから川田のもとへ向かった。結構近づいてから川田がこちらを向いた。がすぐに顔を背けた。え、無反応で！とりあえず川田に声をかけた。

「久しぶりー、川田。元気にしてた？」

…え、無視！？目の前にいるんですけど！！キョロキョロしだした

川田をみて内心焦る。隣の男の人もびつくりした様子でこちらを見ていた。

「いやいや、目の前で無視はなかるうよ、君。橘さんはここですよー?」

もう一度声をかけると明らかに驚いている川田。?なんで?なんかしたっけ…。
あ、そうだ。

「ほ、ほんまにたちー?私をだまそうとしてるんやなくて?」

「あんたをだまして何の得があるんよ(笑)：あ、そうか。痩せてから川田に会ってなかったっけ?」

「そそそそうよ、こんなんになってるなんて知らなかったし!!
びつくりしたわ!」

「こんなんで：ひどない?」

成人式に会って以来やったんや。忘れてた。それにしてもそんなに驚かんでも…。

そんなに変わったかな?少し驚いていると、横から声がかかった。

「あのー、全く状況がつかめてないんやけど…？この人が橘さんなん？」

「そうだ、この人。一体何者なのだろうか。多分知り合いなのだろうけど。なぜここにいる？」

「う、うん。そうみたい。」

「そうみたいってなによ！だから私やっていってるやんか！で、お隣の男性は知り合いなん？」

川田がちんぷんかんぷんなことを言うのですかさず突っ込んだ。そして疑問をぶつけてみた。

私は川田からの答えを予想していたのだけれど。

「はい！オレ、川田の友達裕樹っていいです！どうぞよろしく！」

「は、はあ…、よろしくお願いします。あの…なんで名前だけなんですか？」

「橘さんには名前で呼んでほしいんで、苗字は教えません！裕樹って呼んでな！」

「…」

え、なにこの人。苗字は教えませんか。て。なんじゃそら。ワケがわからず、川田に説明しろ、と目で訴えた。

「とりあえず、たっちーも座り？ゆっくり説明するから。」

なんなんやいきなりこの展開は。苗字は、教えませんが、さんにしよう。

教えませんが裕樹、でええやろ。：長っ！自分で言うて嫌になるわ。とりあえず苗字がわかるまで名前を呼ばんことにしよ。

川田の横に座りながら、ものつすごい笑顔でこちらを見てくる目の前の男を見ながら、私は大きなため息をひとつこぼした。

あ、幸せが逃げた。

1 〽出会い〽 (後書き)

どうしよう…主人公視点より川田視点の方が書いてておもしろい…

2 ｝ c o n t a c t ｝ (前書き)

前回長すぎた： o r z

コンパクトに収められるよう頑張ります。

2 ｝ c o n t a c t ｝

> 裕樹視点 <

川田の紹介で橘さんって人に会うことになった。

といってもいつも微妙な子ばっかやから今日も三人でこれまた微妙な空気で過ごすことになるんやろうなあ…

わかってるんやったら川田に頼まなかったらええ、てよくいわれるんやけど、なんでか彼女を探そうとすると川田が「私が紹介するから！」としゃしゃりでてくるからなあ…

なんか必死で断れへんし。

でもここまではずればっかり紹介されると、むしろ妨害してるんちゃうか、と思うわ。

前回は瓶底メガネ根暗女やったし、前々回は自分のことをかわいいと思ってる残念なブ女やった。

もう川田のことは信用できん…今回も期待はせんぞ！

…と思ってたのが今から2時間前。今オレの目の前にはオレのど真ん中どストライク！な子が座っている。

…奇跡や！ミラクルが起きた！

川田、さっきまで疑って悪かった。お前は最高や！

一人テンションがあがってうきうき状態のオレを横目に、川田が話し出した。

「あのね、たっちー。こいつ、私の前のバイト先の同僚で藤田裕樹っていうんだけど…」

「あ、おい！苗字言うなって！！橘さん、気にせず名前で呼んでな？」

「わかりました、藤田さん。それで、なぜ彼がここに？」

全然わかってねえー！つれないな、橘さん…そのツンとした態度もいいけど。

「さつき偶然会ったんよ。遊ぶんやったら人数多いほうが楽しいし誘ってん。」

「…遊ぶて、私は全然知らん人やのに…」

「そんなこと言わんと！せっかくやし一緒に遊ぼ？」

「（何この満面の笑顔…）なあ、全部裕樹のおごりやし！」

「おう！橘さんの分はな！」

「ちよつと！私の分は！？払わす気なん！？」

「当たり前やろ？なんでお前の分おごらなあかんねん。」

「人がわざわざ友達紹介してやってるっていうの…に…？…あ。」

こいつ…自分で紹介のこと隠そうって言いながらばらしやがった。あほや。

「紹介って、どういうこと？なんの紹介？」

ずっとオレ達のやり取りを黙って見ていた橘さんが口を開いた。ほら見る。

「あ、あのね…実は、さつきそこで会ったって言うのは嘘で、こいつにたっちーを紹介するために今日たっちーを呼んだの。」

「何のために私を紹介するん？もしかして二人結婚するとか？」

「なに言っ…「そんなわけないやんか！オレはフリーですよ！いや、これからそうじゃなくなるか…」」

有り得へんことを言い出したからあわてて否定した。オレが川田と？ないない。

橘さんはまだ腑に落ちない顔をしている。

「そうでなければ…ますます私がここに呼ばれた意味がわからん…。ちゃんとした説明をお願いします。」

「あのね、こいつが…裕樹が女の子の知り合いが欲しいって言うから、たっちーはどうかなって思って紹介したの。（ってここまで言わなきゃわからへんの？）」

「…ああ、そういうことか。それやったら先に言うてくれればよかったのに。」

「だって、断られると思ったから…」

「で、友達なんやろ？別に断る必要ないやん。」

…純情でこういうことか。友達のままで終わるわけないやろ、この年で。

まあそういう風に捉えて近づきやすくなるんやったら、オトモダチからはいるか？

「んじゃひとまずちゃんと自己紹介しよか！オレは藤田裕樹、23才のしし座、O型！大学院生です！」

「橘涼子、同じ年だね。星座とかも必要…」「うん！」「え、とおとめ座でAB型です。」

「AB型！オレと相性ええやん！めっちゃうれしい！」

「…にぎやかやな、藤田さんて。」

「うん、まあ…ね。」

怪訝な顔の涼子ちゃん（すでに名前呼び）もいいなあ…
よし！絶対涼子ちゃんを落としてみせる！

2 ｝ c o n t a c t ｝ (後書き)

裕樹かきにくつ。
頑張るばい。

3 ｝友達｝（前書き）

第三者視点で書く文章力が欲しい…

3 友達？

> 川田視点<

…これはやばい。やばいかもしれない。

裕樹のやつ、たっちーのこと可愛いつて言ってたよね…

本気になって好きになったらどうしよう！

ありえへんわ、なんでたっちーやせてんねん！前会った時はぷくぷくしてたのに！！

たっちーがこんな変わったって知ってたら紹介なんてしなかったのに…

なんとか裕樹がたっちーのことを好きになるのを阻止せな！！

「涼子ちゃんは何んか頼まへん？ケーキおいしいで、ここ！」

「あ、うん。さっきケーキセット食べたんで。」

「そっなんや！オレここのモンブランが好きでさ」

「私も、モンブラン好き…」

嬉しそうにたっちーが微笑む。か、可愛い…たっちーってこんなにかわいかったの！？

ふと裕樹の方を見ると…照れてる？あの女の子をたぶらかす余裕の笑顔ばかりの裕樹が！？

裕樹（か、かわいい…めっちゃうれしそうに笑うやん…こんな可愛い笑顔する子初めて見た！）

急に黙り込んだ私と裕樹をたっちーがいぶかしげに見つめる。こちらの様子を伺っているみたい。

そう、たっちーは昔から他人の顔色を伺いながら話す子だった。

…待てよ、私が少し不機嫌な感じを見せたらたっちーは裕樹と仲良くなることをやめるかも！

「ちょっとお手洗い行ってくるね。たっちーも行こ！」

「うえっ、うん。びっくりした、いきなり。」

「えゝ、オレ一人で待ってるん？涼子ちゃん置いていってくれ！」

「久しぶりに会ったんやからいろいろ話したいの！ナンパでもしとけば？」

なんかわめいてる裕樹を置いてたっちーとお手洗いへ移動した。いきなり誘ったからかなり怪しまれてると思うけど、今はそんなこと気にしない！

「ほんつと久しぶりやんな！たっちー。元気してた？」

「うん、まあまあ。川田は？この前ブログで書いてた気になる人かどうかだったん？」

「うん、その話もしたくてついてきてもらってん。」

「おお！気になる気になる！なんか進展あった？」

「実はな…その気になる、ううん、好きな人な、裕樹やねん。」

「…まじで？そうなんや！それで今日紹介してくれたん？」

「うーん、それもあるんやけど…実はな…？」

私は裕樹が女の子を紹介して欲しいと頼んできたこと、そして私がたっちーを選んだことを簡単に話した。

ずっと静かに話を聞いていたたっちーは私がひと段落をつけると、何か考え込んでいる様子だった。

おもむろに伏せていた顔をあげ、たっちーが口を開いた。

「紹介っていうのは私を、友達としてやなく女の子として藤田さんに紹介することやったんか。わからなかった。」

「考えてたのそこ！？てか普通紹介っていったらわかるやん！」

「だって、こんなん初めてやもん。友達って言われたら納得したけど。それに…」

「それに？何？」

「川田は藤田さんのこと好きなんやろ？なんで紹介することを引き受けたん？」

「ああ、それは。断って嫌われたくないやん？向こうは私のこと友達yaと思ってんねんし。」

「でも、その紹介でもし藤田さんに彼女できたら嫌じゃない？」

それは恋愛になりそうな人を紹介してこんかったから大丈夫…と言ったらたっちーはどういう反応するやろ。なんて言おうか迷ってたらたっちーが続けた。

「…そら好きな人に嫌われたくないもんね。なかなか断れへんよね。ごめんね、無神経なこと言って。」

「う、うん。いいよ。私が断ればよかっただけやし。」

「けなげやなあ、川田は。」

そっぴいながら私の頭を撫で回す。こっちこそ本当にごめんね。完全脈なし女認定して。

少し罪悪感はあるけどそう都合よく考えてくれるんやったら乗っからない手はない。

撫で廻り回す手を止めてたっちーが話しかけてきた。

「それやったら私と藤田さんが話すの、おもしろくないんちゃう？大丈夫？」

「うん…ちょっと見てて辛いかも。」

「やっぱり…それやったら私あんまり話に乗らん方がええやんな？」

「…そうしてもらえたら助かるかも。ごめんな、氣遣わせて！」

「ええよええよ。恋する友人に協力せんで、何が友達か！」

ありがとう、たっちー。本当にやさしいんだから。

でもその笑顔は裕樹の前でみせないでね。協力する気があるんだっ
たら。

3 ｝友達？｝（後書き）

川田が嫌な女に…w

4 〽思惑〽（前書き）

可愛い主人公をめざします。

4 〽思惑〽

> 橘視点<

もう川田の好きな人は藤田さんやったんや。高校の時もああいう明るくて顔の整った人好きやったしまあ当然っちゃあ当然かな？

川田かわいそうやなあ…。本人から頼まれたからとはいえ好きな人に女の子を紹介せなあかんとは…。うちやつたらすぐにくじけるわよし、ここは私が一肌脱ぎましようか！二人をくつつけるぞー！お
！！！！

川田と一緒にトイレから席へと戻った。すると藤田さんが満面の笑みで迎えてくれた。

ふむ、川田はこの笑顔に惚れたわけね。納得。

「遅かったやん！涼子ちゃんの方もモンブラン頼んで待っててん！」

「え、いやさつき食べたし。満足しとうよ？」

「えー、一緒に食べたい！おいしいもんは皆で食べるのがおいしいんやで？」

うゝ、確かに。小さい頃から私はそういわれ育てられてきた。しかもこのモンブラン、いやこのモンブラン様は程よい甘みと渋みが絶妙でいくらかでも食べられる一品…。文字通りのどころから手が出そうなくらい食べたい…。でもここで藤田さんの厚意を受け取ってしまつたら川田に悪いし…

どうする、私！

助けをもとめるべく川田の方に目をやるが、川田はなにやら考え事をしているようだ。…もういいや、食べちゃう。いただく、素直に。

「じゃあ、お言葉に甘えて…。」

「ほんまに！？嬉しいわ♪さっ、食べよ食べよ！」

> 川田視点<

お手洗いから戻ると、裕樹は嬉しそうに私達を迎えた。

何よあの緩みきった顔！そんなにたっちーのこと気に入ったわけ！？

「遅かったやん！涼子ちゃんの方もモンブラン頼んで待っててん！」

「え、いやさつき食べたし。満足しとうよ？」

「えー、一緒に食べたい！おいしいもんは皆で食べるのがおいしいんやで？」

ちよつと、何勝手に話進めてんの！てか私の分は！？少しは気遣いなさいよ！！

いらいらしながら裕樹のことを見ていると、たっちーが返事を返す。

「じゃあ、お言葉に甘えて…。」

「ほんまに！？嬉しいわ♪さっ、食べよ食べよ！」

食べるんかい！やっぱりたちーは色気より食い気やな。まあ安心したわ。…裕樹を喜ばせてるのがむかつくけど。

一人でむしゃくしゃしている私をよそに二人はケーキを食べ始めた。

「ん〜！まじうまい！この栗ペーストがたまらん！な、涼子ちゃん？」

「……………」

たちーは答えない。ずっとうつむいたままの状態を保っている。

「？どうした？涼子ちゃん？」

「…はっ！ごめん、何？」

「いや、声かけたけど反応なかったから…」

「あ、あの…ほんまにモンブラン好きやから…いつも喜びをかみしめながら食べんねん。」

頬を染めながら嬉しそうにモンブランへの気持ちを言葉にするたちー。

愛の告白か！何を恥らってんねん！心の中で盛大に突っ込みを入れ

ていると裕樹がうめきだした。

「…か、」

「「か？」」

「か、可愛すぎる…！」

はあ〜！？なんやねん！おまえのつばは一体どうなってんの！？
そんな可愛くないし！しかもいつも『オレのタイプはクールビュー
ティ！』とか熱弁してたくせに！

いきなりほめられたたっちはちょっと見ただけでテンパっている
のがわかる。

「な、な、なあに言うてらっしゃるのですけえ！？」
何弁やねん。

「だってほんまに可愛いかってんもん！だからそのまま言った。」

「あ、あかん、川田なんとかして。こんなん初めてでどうしたらえ
えかわからん！」

もう無理です！と白旗をあげるたっちーを受け、どうすれば裕樹の
興味をなくすことができるか、学問の方面には全く生かされなかつ

た頭脳をフル稼働して考えた。

…この手があつたやん」状況を打開すべく二人に割って入った。

「そうやねん！ たっちーっておいしいもの食べてる時めっちゃ嬉しそうに食べるやろー？ 高校の時もそういうところが人気あつてん！」
「この顔を他の男も見てたんか！ めっちゃ腹立つ…」

そこまで一気に言うと、たっちーはなに言つてんだこいつ、と言わんばかりに目を見開いていた。横目で見ながら続ける。

「でもー、その頻度というか、食べてる量が普通やなかったよね、たっちー？」

「…え？」

「なにそれ？ どういう意味なん！？」

クスッ、食いついた食いついた。たっちーはいまだに何がなんだかわからない顔をしている。ごめんね？ でも本当のことを言うだけやし？ 別に悪いことはしてないから。

「だからー、甘いものとか好きすぎてめっちゃめっちゃお菓子とか食べてたんよ。食べすぎやでっていつも言つてたのに。」

「…」

「へえー、涼子ちゃんスイーツ好きなんや。オレと一緒にやな！」

「それだけやないんよ。甘いものって結構太りやすかったりするや

ん？それやから… たっちーって高校の時今よりもだいぶんくよかや
ったやんなあ？」

「…う、ん。そうやね。」

「…まじ？想像できひんわー。」

「今高校のときの写メあるで？…ほら！」

私は得意になって高校のときのたっちーの写メを裕樹に見せた。

写メはたっちーと、友達の間で一番細かった子とのツーショット。

たっちーには何もいってなかったけど、この写メを見ていつも友達
の間で爆笑してた。”美女と野獣”って。

さすがにこの写メ見たら裕樹も引いて好きになろうなんて思わんや
ろ。

これでめでたしめでたし！

「…これ、合成とか人違いとかやなくてほんまに涼子ちゃん？」

「…そう、やで。」

「…そっか。」

ふふ、ほら、ドン引きしてる。これでまた彼女ができる心配がしば
らくなくなっただわ。

あー、よかった。たっちーには悪いけど、これは過去のたっちー本
人なんやからなんも文句言えへんよね？協力してくれるって言った
し！

冷蔵庫女が痩せて調子乗るから悪いねん。…いい気味！

4 〴〵思惑〴〵（後書き）

川田…w w

たっちーかわいそうやわ、自分で書いてて。

5 〽思惑2〽（前書き）

誤字発見。編集機能がわからず自分でユニーク数増やす羽目にw w

痛い子w

5 〽思惑2〽

> 橘視点<

…衝撃です。橘涼子、ただいまプチパニック中です。

恋する乙女は強くなる、とよく聞きますがここまでとは。

いや強いというか…怖い。恐怖です。

そらー二人の仲を取り持つ協力をするといいましたけども。まさかここまで貶められるとは。

正直、私の高校時代なんて今は関係ないのでは、と思っている。実際関係ないでしょう。

私の過去を引き合いに出すことで藤田さんと川田の距離は縮まるのかな？

そういうことなら…まあ、藤田さんとはもう会うこともないだろうしいいんだけど。

…本当は結構きついけど。

「川田の言うとおり、私高校の時かなり太ってて…はは、たんすみたいな体型やったんよ。」

「そんなあ、たんすなんて言い過ぎちゃう？おもろいけど笑」

「…」

気まずさを紛らわすように明るく振舞ってみた。…藤田さんは言葉を発しない。

川田ー、この空気どうすんの？わざわざ地元戻ってきて初めて会っ

た人に嫌われるとか。笑えねー！

沈鬱な空気に耐えられずそわそわしてしまう。川田はといえはなんかにやにやしてる。怖っ！

と、写メをガン見していた藤田さんが顔を跳ね上げた。

「涼子ちゃん」

「は、はい！」

驚いて変な声でた。急になんなのだ。

「すっつげ〜努力したんやねー！」

「…はい？」

はぁいい？努力ってなんの！？太る努力？そんなもんせえへんがな！
目が点になっている私を尻目に藤田さんは続ける。

「言ったら悪いけどさ、高校時代の涼子ちゃんてかなり大柄やん？
でも今は守ってあげたいオーラ全開の女の子やんか！めっちゃダイ
エツトとか頑張ったんちゃう？」

「ええ、まあ…早く人間になりたかったの。（どんなオーラやね
ん…）」

「人間て（笑）ベムか！」
「えっ、知ってんの？元ネタ。」
「おん！オレアニメおたくやし（笑）」
「そうなんや！実は私も（笑）」
「そうなん！？趣味あうやん♪」

ものすごい馬鹿にされているのかと思ったけど、彼は予想の斜め上を軽々超えました。

今の大学でも昔のことが話題に出たとき、かなり引かれた。友達と
思ってた子が白い目で見てくるようになったりもした。やっぱり元
デブなんてだめなんかな、とずっと思ってたのに。

彼は、私の努力を認めてくれた。

…なんか、ときどきしてきた。初めてのことでびっくりしたからか
な？めっさ嬉しい。
しかもアニオタとか！意外すぎる！

バン！ ビクウウツ！

大きな音がした。2センチくらい跳ね上がった。

何なの！音がした方を見やる。川田が机に両手をついていた。…川田が音をたてたのか。

「ど、どうしたん？具合悪い？」

一応声をかけてみる。

「…別に。」

え、エリカ様！？古いネタ持ってきた！

ん、何か機嫌を損ねるようなことをしただろうか。

「でもさ、ほんま変わりすぎちゃう？…どうやって痩せたん？」

「え、どうやってて言われてもなあ。ウォーキングとか毎日したりかな。」

「ウォーキングした位で痩せるん？…整形とかちゃうん？」

…なにを言っているのだろうか、こいつは。急に話し出したかと思えば。

もう協力とかくっつけるとかやない。ただただ私の悪口言ってるだ

けやん。

でもここで川田を非難すると後がめんどくさい。経験上わかる。とりあえず話題をそらそう。

「整形やったら可愛くしてもらおうわ！整形とかはしてへんよ。お金かかるし。もういいやん、私の話は！」

「えゝ、オレもつと涼子ちゃんのこと知りたい！」

何言つのこの子は！空気を読んでください！

「たっちーの言うとおり。いいやん、たっちーの話なんか。」

ふってきたん自分やんか！しかもなんかって…。いややめよて自分で言ったんやけど。わかりやすすぎるで、川田。

「なんかさつきから美佳機嫌悪ない？急になんなん？」

「そんなことないよ。気のせいちゃう？」

「ふゝん…」

藤田さんまでもが不審に感じるほどなんやからよっぽどや。これ以上この態度やとくつつくどころか嫌われてまうんちゃうか…。なん

とか空気を換えよう！

「まあまあ、せっかく集まったんやし、どっか移動せえへん？ 天気もいいし！」

「おお、ええなあそれ！！ 涼子ちゃんどこ行きたい？」

ふう、なんとか大丈夫そうや！

ああ、今日一日川田のご機嫌とりながら行動せなあかんのか… ちよつと憂鬱。

6 〽前進〽（前書き）

久しぶりすぎて筋忘れちゃった。
よしなしことを書き綴ります。

あと書き方変えてみます。

6 へ前進へ

「涼子ちゃんはどこ行きたいん？遊園地？それとも映画？？」

（なんちゅう王道な…て、王道もくそもデートとかほとんどしたことなくいけど）

私は恋愛経験が、自分で言うのもいささかの寂しさを感じるが、0に等しい。

いうなれば恋愛ビギナーである。

なのでキスはもちろん、殿方と手をつないだこともないのだ。はっはっは、まいったか！

「私はどこでもいいよ。藤田さんと川田の好きなところにして？」

「そう？せやったら俺がエスコートするわ！…というわけで美佳、おつかれさん！」

「…は！？なんで私帰らなあかんのよ！」

何をとち狂った、青年よ。

今この状況で川田を帰らせようとするあなたの思考回路を小一時間ほど調べ上げたいわ。

もう私は知らない。藤田さんの尻拭いはできひんよおいらは。

烈火のごとく声を張り上げた川田は藤田さんを引つ張り通路でこそと話し出した。

内緒話ですかい。そうですかい。いいよ、モンブラン食べとくもん。

~~~~~

「裕樹、どういつつもりなん！？いつもはこの後も三人で回ってたやん！」

「それは今までの話やろ？今まで紹介された子は俺のタイプやなかったし、仲良くしようとも思わなかったもん。でも涼子ちゃんかわいし話し合いそうやし！絶対ゲツトするわ、俺！！」

「つつ！！た、たちーはほんまはめっちゃ性格悪くて友達の中でも嫌われてたんよ！それやから仲良くするのはやめといたほうがええって！」

「…それやったらなんで俺に涼子ちゃんを紹介したん？嫌がらせ？」

「そつ、それは…違うねん！…実はたちーに男紹介しろって言われて、しぶしぶ裕樹を紹介することになって…」

「性格悪い子紹介するとかどっちにしろ俺への嫌がらせやん。それに涼子ちゃんはそのなことするような子に見えへんし。嫌な子かどうかは自分で判断するわ。」

もうええよ、ようわからんけどとりあえず俺は涼子ちゃんと仲良くなりたいだけやねん。紹介してくれてどうもありがとう。それじゃ。」

「ちよつと待って！裕樹！」

~~~~~

「涼子ちゃん待たせてごめん？ほないこか！」

「話終わったんや…て、えっ、あの、川田はええの？」

「ああ、元々俺らを会わせるために来てくれたわけやし、ここからは若い二人に任せるってことで！」

「お見合いか」

「おお、するどい突っ込みやな！俺もうかうかしてられへんな！」

…なんか流れて二人で遊びに行くことになったけど、川田は大丈夫なんやろか。

まああの不機嫌なお嬢さんに気遣って過ごすよりもおらんほうがありがたいけど…

あかんあかん。こんな考えではいかん。

とりあえず後でメールしてみよ。精一杯フォローすれば大丈夫やろ。多分。

あそこまで必死に私を貶めてまで藤田さんの興味を私から逸らそうとしていた川田。

やっぱそれって”恋”の成せる業なんかなあ…。

もうこの5年ほど恋愛感情なんて微塵も持ってないから、恋をしている川田のことが純粹にうらやましくもあり、反面理解できない、という心もある。

私も恋したらあんなふうに何かに必死になれるのかなあ…。
て、まず相手おらんやん！これが本当の一人相撲ってか！

この時はまだ何も知らなかった。いや知る由もなかった。
自分ともっとも対極にあるものだと思っていた感情が自分を大きく
振り回し始めることを。

そしてその感情ゆえに自分を取り巻く環境が大きく変化していくと
いうことを。

6 〱前進〱（後書き）

フラグ立ててみたwww

どうなるか自分でもよくわかっていません。

ひとつ言える事は。

川田ごめん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5104q/>

初めましてから始めよう

2011年9月18日22時14分発行